

平成28年 酒田出身の人物 展示人物一覧

展示期間：平成28年1月5日～12月28日午前（2階常設展示室）

いとう せいき
伊東 清基（医師） 天保11年（1840）～明治28年（1895）



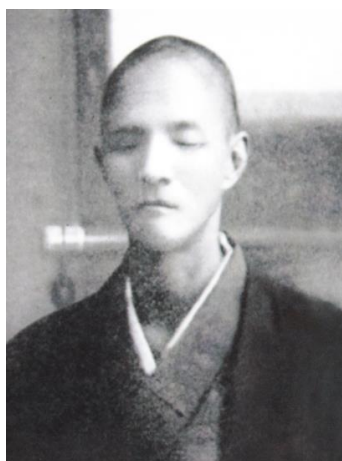
仙台藩士・諏訪主水の三男として生まれる。16歳で江戸へ出て蘭学を学び、明治元年に師・伊東朴斎にともなって酒田へ移住、開業する。

明治12年に飽海郡開業医公会幹事長となったことをはじめとして、十全堂社長、大日本衛生飽海支会長などの要職をつとめ、漢方薬が主流だった酒田の医学界において、西洋医学の普及をはかった。

明治16年、荒町にあった十全堂が手狭となり移築されたが、これも清基の力によるところが大きいとされている。

明治28年、酒田でコレラが流行すると身を挺して治療、防疫につとめたが、自らも感染し、死亡した。人望も厚く、葬儀の会葬者は本間家の当主を上回ったと伝えられている。

たちばな しゅうぞん
橋 周存（点字普及功労者） 元治元年（1864）～昭和6年（1931）



個人提供

寺町（現在の寿町）の雲照寺に生まれる。

4歳で失明し、遊佐出身の医師・時岡淳徳に医術、鍼、按摩を学び、15年かけてこれらを習得する。

明治19年には鍼灸按摩業をはじめ、そのかたわら、私財を投じて視覚障害者のために家塾を開き、点字の普及に尽力した。

大正14年、光丘文庫に「最新薬物学」などの点字本を寄贈、昭和2年にも橋門下同窓会の名で「点字読本」などを寄贈している。

昭和4年、視覚障害者の学徳の向上と点字普及を目的に、光丘文庫に「点字読書会」を設立し、その顧問となる。周存の遺志を継ぎ、現在も「酒田点字読書会」として活動が続けられている。

いしわたり こうのすけ
石渡 幸之輔 (実業家) 慶応2年 (1866) ~昭和13年 (1938)



松山文化伝承館提供

松山藩御用昼師・石渡卯三郎の次男として生まれる。
少年時代は松山城の藩学に学び、のちに庄内藩の剣道師・須田多賀治のもとで剣道と学問を修める。

明治16年頃、上京し、皇典講究所所長の佐々木高行の書生となる。明治23年には、創設されたばかりの國學院大学に入学、書生をしながら通学した。

卒業後は佐渡金山や韓国の金山などで働いた後、東京で石渡電機製作所を創立し、二股ソケット等を販売して成功を収めた。

国家のために働きたいという強い意志のもと、工場の脇に剣道場を設けて工員を通わせ、単に剣道の修行を行うだけではなく、人間教育の場を目指した。

また、明治43年には、母校の國學院大学に剣道場「振武館」を寄贈している。

あべ まさき
阿部 正巳 (郷土史家) 明治12年 (1879) ~昭和21年 (1946)



金融業で財を成した阿部^{せきや}拓弥の長男として、松嶺町内町 (旧松山町) に生まれる。

鶴岡の荘内中学校を卒業後、上京し、哲学館 (現在の東洋大学) に学ぶ。

明治43年、北海道庁で北海道史編纂係となったが、大正7年に酒田に戻り、酒田町史編纂主務者となる。のち、白崎良也の招きによって光丘文庫に移り、庄内の古代から明治に至るまで、広範囲にわたって調査・研究を行い、様々な記録を残している。

また、昭和6年から翌年にかけて、城輪柵址発掘調査を指導した。考古学、歴史学など、広範囲にわたる研究成果は、庄内の歴史を知る上で、大切な基礎となっている

※戸籍上は「正巳」であるが、著作には「正己」を多用している。

さいとう かねきち
齋藤 兼吉 (指物師) 明治17年(1884)～昭和45年(1970)



鷹町(現在の相生町)に生まれる。号は如斎。

指物師をしていた父の元で12歳から修業をはじめ、18歳から23歳まで、酒田の名匠といわれた鉄砲屋亀斎、後藤又吉の通い弟子となる。

大正7年に上京、日本橋の名指物師・前田桑明に師事し、飾り棚の製作の腕を磨いた。

その技術の高さから、翌年には山形工業試験場の木工科職工長に招かれ、県内各地で木工の指導を行っている。同10年には酒田へ戻り、指物業を営んだ。

大正15年には、パリ万国博覧会へ食器棚を出品し、見事受賞した。

飾り棚、火鉢類、お盆の製作を得意とした。中でも飾り棚には多くの名品が残されており、「箱物は鉄砲屋、棚物は兼吉」として師匠の鉄砲屋と並び、酒田の指物界で高く評価された。

とだ
戸田 みつき (洋画家) 明治39年(1906)～平成8年(1996)



本間美術館提供

飽海郡観音寺村(旧八幡町)に生まれる。

大正12年に酒田高等女学校を卒業後、東京女子美術学校に入学、日本画家の結城素明に絵を教わる。若くして亡くなった酒田出身の画家・小野幸吉とも交流があった。

昭和2年に卒業すると、大分県大分市の岩田実科高等女学校に勤務する。結婚後の20年間は童話の挿絵を描き、絵画教室で絵を教えて生活をしていた。

その後洋画家へ轉身し、昭和38年、大調和展へ出品、翌年会員に推挙される。会長の武者小路実篤は、個展の推薦文も書いている。

杉並アマチュア美術連盟の指導者としても活躍し、昭和51年には70歳で渡米し、各地を写生して回った。

ハンコタンナや鳥海山など、働く女性の姿や庄内の風土を好んで描いた。

こまつ やろく
小松 弥六 (彫刻家) 明治43年(1910)～昭和20年(1945)



個人提供

飽海郡日向村草津(旧八幡町)に生まれる。

子どものころから手先が器用で、何かを作ったり直したりすることが好きだったという。

南遊佐村の彫刻家・高橋為吉に師事し、創作に励む。

昭和5年、日本美術学校彫塑科に入学し、同8年卒業、2年後には同校の助教授となる。

昭和9年、第14回帝国美術院展に入選、その後、文部省美術展に4回入選した。

昭和15年には、文部省主催紀元二千六百年奉祝美術展にも入選している。

太平洋戦争が始まると出兵、昭和20年にフィリピンで戦死した。